

心霊コンピューター 登場人物

林克則	(45)	探偵事務所所長
林沙也 ^{さや}	(42)	克則の妻
三枝聡子 ^{さえぐさとこ}	(42)	沙也の姉
三枝健三	(43)	聡子の夫
医師	(39)	
佐々木	(52)	刑事
三枝菊	(72)	健三の実母
三枝真央 ^{まお}	(10)	健三の長男
市民課受付嬢	(51)	
旭小学校教頭	(59)	
田中美恵子	(34)	真央の担任
三村祥子	(10)	真央の同級生
捜索本部受付嬢	(22)	
大川禎一	(42)	依頼人
大川美加	(38)	禎一の妻
前田勇	(35)	美加の不倫相手
田所恭介	(68)	民生委員
明智百合	(55)	

鶴見区児童養護施設あさがお荘主任

ホテルの受付の老人 (72)

警官 (25)

心霊コンピューター

○ 広い駐車場のある2階建てマンション外観

○ 一階のミニスーパーの横の階段

○ 2階林探偵事務所入り口

入口のすりガラス戸に「林探偵事務所」
の名がある。

○ 同・事務所内

正面の机に所長、林克則（かつのり45）が書類をめぐっている。

その斜め前の机には、妻沙也（さや42）がパソコンで書類を作成中。

そのとき電話の呼び出し音。

沙也、電話を取る。

沙也「はい、林探偵事務所です。

え？ 姉ちゃん？

どうしたの？

ちよつと待って。

もつとゆっくりしやべって！」

克則「おい、姉ちゃんか？」

沙也、うなずいて、手で克則を押さえる仕草。

沙也「明日、明日ね。」

待ってるわ。

何時ごろ？

お昼ごろ？

わかった、待ってるわ」

電話を置く沙也。

克則「何なんだ」

沙也「聡子さとこ（42 沙也の双子の姉）が明日

逃げてくるって」

克則「そうか、ついに逃げるか。

一体何年DVを我慢したんだ」

沙也「そう、3年ぐらいかな」

克則「俺が乗り込んで健三（聡子の夫・43）を脅しつけたのが一年前。」

その時わかったんだ。

あいつの暴力は治らないって」

沙也「それでもなかなか別れられなかったの

よね。

姉ちゃん完全にあいつに支配されてたか

ら」

克則「俺が車で迎えに行こうか」

沙也「あいつと鉢合わせしたら、血を見るこ

とになるかも。

それは止めといた方がいいわ」

克則「でも心配だな」

沙也「あいつと完全に切れるには、姉ちゃん

が自分から動かないとだめよ。

あなたが迎えに行ったら、それはちよつと

違うことになるから」

克則「面倒くさいんだな、おまえさんは」

沙也「今頃気が付いたの？」

20年も連れ添って」

克則「まあいい。

部屋はあるんだし、使ってもらえばいい。

俺も心のつかえが取れる」

沙也「姉ちゃんと暮らし始めると、あなたに

迷惑がかかるかもしれないけど」

克則「そんなことはない。

そのほうがいいんだ。

違うところに逃げると、健三に探し出され

ても、助けようがない」

沙也「そうね、そのとおりだわ」

T
翌日

○ 2 階の探偵事務所入り口（朝）

沙也が入口の鉢植えの下に鍵を隠して
いる。

克則「姉ちゃんにそこわかるか？」

沙也「前から教えてあるから」

克則「じゃ、散歩だ。

一時間もかからないから、戻って来たって

7 時。

大丈夫だろう。

行こう」

沙也「ええ」

1 階への階段を下りる二人。

○ 近くの公園前の散歩コース（朝）

片道 1 車線の右側の路側帯を、ガード

レールが無いので右によって一列で

歩く二人。

沙也が前を歩く。

と、その時。前から猛スピードでカーブを走ってくるプリウス。

克則「あっ！ あぶない！」

克則は咄嗟^{とっさ}に沙也の体を、道路と反対の公園の方に突き飛ばす。

次の瞬間、克則の体は跳ね飛ばされ、空中に舞う。

T そのまた翌日

○病院の病室

克則と医師がもめている。

医師（39）「駄目ですって。

せめてもう1日」

克則「でも、どこにも怪我は無いんでしょ。

ほら。こんなに歩ける。

頭も大丈夫」

頭を捻って見せる。

医師「車の事故は後から症状が出ることもあるから」

克則「そのときはそのとき。

私はこれで帰ります。

家内のことが心配だから」

看護師「先生、いくら言っても駄目ですよ。

このひと頑固なんだから。

はい、この請求書持って会計に行ってください。

さい。

お金を払えば自由よ。

払ってきたら、お巡りさん立ち合いです。あなたの財布から取り出したこのマイナバン

「カード返します」

克則「どうも有難う。

じゃあ」

と、そのとき一人の男がやって来る。

佐々木刑事（52）「あなた林さん？」

克則「そうですけど」

佐々木「あなたの事故はひき逃げなので、刑

事事件として扱われます。

事故の詳細を伺いたいんですけど、こちら

へ」

と待合室へ案内される。

○待合室

克則「と、まあそういうことらしいけど」

佐々木「事故のことは憶えていない？」

克則「そうなんです。

跳ね飛ばされたのは憶えているけど、そこ

から先、プツン」

佐々木「車は、黒のプリウス？」

克則「黒だと思っただけだね」

佐々木「ダブルブルーってのもありますよ」

克則「咄嗟のことでそこまでは・・・」

それより家内はどうなったのか」

佐々木「家内って」

克則「家内と一緒に散歩してたんだ」。

公園の方に突き飛ばしたから、多分事故に

は遭^あつてないと思うんだけど」

佐々木「通報には、奥さんのことは無かったけど」

克則「そんなはずはない」。

現場は調べたんですか」

佐々木「もちろん」。

公園の中も遺留品が飛んでいないか調べた」

克則「おかしいな」。

一人で家に帰るはずないけど」。

もしかしたら、運転手が誘拐したとか」

佐々木「唯一の目撃者としたら、その可能性

も無いとは言えないけど」。

だけど、そんな話聞いたことない」

克則「そうだ、家に帰ってるのかも、

なんで思いつかなかったんだろう」

佐々木「ご主人のあなたを置いていて？」

克則「そうだな、それもおかしいな。」

ともかく電話してみる」

と、携帯を取り出して名前をタッチ。

しばらく着信音が鳴り、

三枝聡子さえぐさとこへ42 沙也の姉「はい、林探偵事

務所です」

克則「えっ？

沙也か？」

聡子「違います、聡子です」

克則「そうか、そうなのか。

もう来てたのか・

あの、沙也帰ってる？」

聡子「沙也ちゃん？

いいえ」

克則「おかしいな。

わかった。

俺ももうすぐ帰るから」

と携帯を切る。

克則「ともかく帰ります。

あとよろしく」

佐々木「あの、名刺もらってもいい？」

克則「ああ、いいですよ」

と名刺を渡す。

○探偵事務所の応接間

ドアを開けて克則が入ってくる。

克則「ただいま」

ソファにぼんやり座っていた聡子が立ち上がる。

克則「あつ、沙也！」

聡子「聡子です。

勝手に入ってすみません」

克則「いや。

やつぱり双子だな、よく似てる。

それよりも沙也がいなくなった」

聡子「いなくなっただって。

なぜ？」

克則「実は昨日交通事故に逢って、俺だけ病

院に担ぎ込まれて、沙也がどうなったのか
わからない」

聡子「そう言えは、この額の傷」

と傷に触る。

冷たい指先に驚く克則。

聡子の手に触れて

克則「なんでこんなに冷たいんだ。

初夏だぜ。

病気なのか」

聡子「いいえ、元気です」

克則「元気ならいいけど」

聡子「どうします？　沙也ちゃん」

克則「そうさな。

病院から帰る時、事故現場も行って見たん

だけどいなかった。

捜索願を明日警察に出す」

聡子「今すぐ出せないの？」

克則「捜し始めてヒョッコリ帰ってくるこ

があるから、一日は待つというのがルール」

そのとき居間の扉が開いて、聡子の義

母の菊（72）と聡子の子供の直央（^な10）が入ってくる。

直央「あっ、おじさん！」

と、飛びついて来る。

菊「ご無沙汰しております。

今回はたいへん迷惑をかけまして」

克則「いやいや、お義母^{かあ}さん。

どうぞ気にしないで、いつまで居てもかまいませんから。

それにしても、その目のあざ、あなたまで」

聡子「あの人が暴力をふるい始めると、いつ

もお義母さんが割って入って、それで殴られて・・・」

直央「お母さん、お腹すいた」

克則「お、もうお昼か。

よし、一階のスーパーで寿司買ってくる。

直央、寿司好きか」

直央「うん」

さっさと出てゆく克則。

○ 同・居間

4 人が食材を食べ終える。

聡子「お寿司有難うございました」

克則「いや、なに。」

それより、お義母さんの作ってくれたきのこのすまし汁、おいしかった」

菊「そんなに褒められるほどでは」

克則「いや、ほんとおいしかった。」

有難うございます。

ところで姉さん、お願いがあります。

沙也が帰って来るまで、お義母^かさんと一緒に炊事・洗濯をお願いできませんか。

俺もできなくは無いけど、手伝ってもらえればありがたいが」

聡子「なんだ、そういうこと。」

もちろんやります」

克則「すみません。」

あの、逃げてくるとき、なにか荷物は持ってきた？」

聡子「あの人がいっ帰ってくるかわからない

から、なにも持ち出せませんでした。

こつそり貯めていた3万円だけ」

克則「そう」

と後ろを向いて、机の中からお金を取り出し、封筒に入れる。

克則「とりあえずこれを使ってください。

着の身着のままで逃げて来たので、下着とか、身の回りのものが必要でしょう。足りなくなれば出しますから」

聡子、封筒の中身を見て驚く。

聡子「こんなに」

克則「直央ちゃんもできるだけ早くこの学校へ行った方がいいし。文房具も要るし」

聡子、目頭を押さえて、涙目で

聡子「・・・ほんとにすみません」

克則「いいえ、

沙也がいれば同じようにしたはず。

俺はこれから姉さんの家へ行って、あなたが忘れて来たマイナンバー・カードや年金証書、それから健康保険証なんかを取って

きます。

どこにあるんですか？」

聡子「あの人の部屋の机の、一番上の引き出

しの中ですよ。

すみません」

克則「いいんですよ」

部屋から出てゆく克則。

○三枝健三の家（外観） さえぐさ

目立たない薄汚れた軽自動車が、少し離れた空き地の側に停まる。

中から出て来た克則。

手に手袋を。

そのまま玄関へ。

チャイムを鳴らす。

もう一度慣らす。

克則、玄関のノブを引っ張ってみるが開かない。

ポケットから万能キーを取り出し、周りを確かめてからキーを操作。

ドアが開き、素早く中へ入る克則。

○同・健三の部屋の中

入って来て驚く克則。

壁一面にサバイバル・ナイフや戦闘用ナイフが陳列されている。

克則「あいつ、異常だな。」

これって銃刀法違反だよ」

すぐ机の前へ。

一番上の、鍵のかかっている引き出しを、やはり万能キーで開き、聡子や菊や直央の証書類、銀行通帳、印鑑、カード類を探してポケットへ。

そして百万円の札束が20程。

そばにあった紙袋へ10束押し込む。

なにか物音がしたような気がして、すぐ部屋を出る。

克則「なんかゾットするなあ、この家。

さっさと引き上げよう」

○車の前

足早に車の傍へ。

ドアを開いて乗り込み、エンジンを掛ける。

そのまま離れてゆく車。

○探偵事務所の中

克則入ってくる。

チャイムに気づいた聡子が入ってくる。

聡子「お帰りでしたか。

どうでした、あの家」

克則「だれもいませんでしたよ。

仕事に行ってたんでしょ。

保険証に年金関係、それに（紙バッグを広

げて）お金も一千万」

聡子「それって泥棒・・・」

克則「泥棒の訳ない。

あなたはあの家、いわば共同経営者なんだから、これくらい貰って当然でしょ」

聡子「でも」

克則「心配しないで。」

それより、この転居届に記入してください。

お母さんも、直央ちゃんも一枚ずつ自筆で」

聡子「鶴見区まで行ってきたんですか」

克則「書類はネットでダウンロードできるんですよ。」

ただ、DV被害の事も有るし、健三が来ても、新しい転居先を教えないように御願いするため、4人で役所へ行きましょう」

聡子「そうですね」

○同・キッチン（夜）

机の上には、なす、かぼちゃ、いんげん、エビの天ぷらと、人数分の素麺の鉢と天つゆの入ったガラスコップ。

克則「さあ、頂きましたよう。」

美味しそうだ」

直央「いただきます」

克則「ほらほら、直央、たくさん食べるんだぞ。」

ほら、おじさんのこの筋肉見てみる」

と腕の袖をめくって力こぶを見せる。

直央「わあ、すごい！」

克則「うらやましかったらどんどん食べる。

ほらこの海老天も、そら」

直央「うん」

聡子「それあなたの・・・」

克則「いいんですよ。」

俺は少々太り気味だから」

菊「まあ、そんなふうには見えないけど。

ほんとにスマート。

私が50も若ければ・・・」

聡子「若ければどうするっていうんです？」

菊「いえ、あの」

克則「私も50も年取っていれば、ね？」

聡子「いい加減にしてください。」

子供の前ですよ」

みなで笑う。

○同・ダイニング・キッチン（深夜）

克則、キッチンに入って来て、常夜灯の下で棚のウイスキーのボトルを手取る。

グラスに少し入れ、冷蔵庫から氷を。

そして、チビチビ飲み始める。

そこへ聡子がパジャマ姿で入ってきて、照明を点ける。

克則「ああ、姉さん」

聡子「どうしたんですか、夜中に」

克則「今日一番に沙也の搜索願を出してきたんですがね。」

もしかしたらこのまま逢えないのじゃないかと思うと、とても寝てられなくて」

聡子「そう、そうね」

克則「沙也は年2回、友達と一泊の旅行をするんだけど、その一人きりの夜は、やつぱり眠られなくて。」

何をするでもなく、テレビを見ながら、二人で、たわいもない話をしているだけですけど、いないとさみしくて」

聡子「何でもないことの積み重ねが、いい夫婦の元なのね。」

沙也は、克則さんの良い精神安定剤なのよ。

私の主人とは、そんな関係は微塵もなかったわ。

うらやましい」

克則「ああ、もう一杯飲もうかな。」

姉さんもどうぞです」

聡子「そうね、一杯だけ貰うわ」

克則、2つのショットグラスにオン・ザ・ロックを作る。

克則「沙也よ、無事であれ」

聡子「無事であれ」

二人はウィスキーを飲み干す。

克則「姉さんのおかげで眠れそうです。」

おやすみ」

聡子「おやすみなさい」

T
鶴見区役所

○配偶者暴力相談支援センターの部屋の前

部屋の外のベンチで座っている克則と

直央。

部屋から出てくる聡子と菊。

聡子「終わったわ。

これまでのDVの様子を事細かく聞かれて

参ってしまったわ」

克則「DV被害証明書くれましたか」

聡子「ええ」

克則「じゃ、1階の市民課へ行つて、転居手

続きをしましょう」

4人はエレベーターの方へ。

○市民課カウンター

自分の番号が表示されてから、菊と聡

子はカウンターへ。

3枚の転居届を出す聡子。

聡子「(DV被害証明書も出しながら)主人が

転居先を教えろと言つて来ても、決して教

えないでください」

市民課受付嬢（５１）「ああ、はい。わかりました。」

大丈夫ですよ」

聡子「じゃ、よろしくお願いします」

克則ら４人、係りの職員に頭を下げてその場を離れる。

○旭小学校外観

○旭小学校駐車場

○車の中

克則「じゃあ直央ちゃん、お母さんと一緒にお別れの挨拶をしてきなさい」

直央「うん」

そうして二人は車から降りる。

○職員室

戸を開いて聡子と直央入ってくる。
教頭の机の前まで行く。

聡子「昨日電話しました三枝です」

教頭（59）「ああ、はいはい。

在学証明書と、教科書無償給与証明書です

ね。

ここに用意してあります。

どうぞ」

聡子「お手間を掛けさせました。

有難うございます。

あの、5年のクラスの子たちにお別れの挨拶

をさせたいのですが」

教頭「あ、はい、えーっと。

あ、教室にいますね、この時間。

じゃ、行きましょう」

○5年生の教室

戸が開いて教頭が入ってくる。

教頭「田中先生」

教頭、担任の田中美恵子（34）の耳

元でささやく。

田中「はい、わかりました」

教頭、部屋の外の直央に手まねき。

直央、入って来て、田中の側に立つ。

田中「みなさん、今日、三枝君が転校する
ことになりました。」

お別れのあいさつに来てくれました。

三枝君、どうぞ」

直央、ドギマギしながら

直央「いろいろあつてこの学校から出ていく
ことになりました。」

有難うございました」

すると、一人の女の子三村祥子（10）

が、目に涙を浮かべて寄って来て、直
央を抱きしめる。

三村「三枝君！」

直央も驚きながらも彼女を抱きしめる。
しばらくして直央が体を離す。

直央「元気でね」

三村「うん」

田中「それではみんな、拍手で三枝君を送っ
てあげましょう」

みんなが拍手するなか、直央は教室を
後にする。

○小学校駐車場の車の中

聡子と直央が乗り込む。

克則「じゃ、帰るよ」

車は発進する。

聡子「あの子、直央ちゃんと仲が良かったの？」

直央「うん」

聡子「でも涙を浮かべてたじゃないの」

直央「よくわからない。

あの子長い間入院してたんだ。

退院したとは聞いてなかったけど」

聡子「そう、そうなの。

それにしても、クラスの人数少なすぎな

い？

窓の外から数えたら、15人しかいなかった

んだけど」

直央「うん、たしか35人だったはず・・・。

それに知った顔は三村さんだけだった。
なんか怖かった」

克則「そういえば、町ゆく人の数も少ない。
車も」

○林探偵事務所（朝）

聡子「小学校へ行ってきます。

通学路を憶えるため、ゆっくり歩いて行きます」

克則「それがいい」

直央「おじさん、行ってきます」

克則「はい、いつてらっしゃい」

二人を送り出した後、沙也のデスクに座って、引き出しを調べる克則。

克則「おお、これだ」

小さな電話帳を見付ける克則。

それにはFRENDSの題字が。

その一つの番号に電話する。

呼出音が鳴っているが出ない。

続いてほかの番号も。

それも出ない。

こうして全部の電話が出ないことに驚く克則。

克則「こんなことってあるのか。」

もしかしてNTTが・・・。

いやあ、呼出音はなっている。

故障ではない。

友だちの線もだめか。

一体どこへ消えたんだ」

克則「緊急性のある案件は・・・」

DELLのノートパソコン（以後DELLと表記）を起動し事案のホルダーを開く。

三件の事案が表示される。

その内、（8歳の少年行方不明）をダブルクリック。

少年の写真と共に、行方不明になった場所の地図と詳細が表示される。

目立つところに賞金300万円の記事。
それをメモしてデスクトップに戻る。
その時、見慣れないアイコンがあるの
に気づく。

（尋ね人）の表示。

克則「なんだこれ。」

こんなの入れた覚えはないが・・・。
間違ってインストールしたのか？」

そのアイコンをダブルクリックしよう
として手が停まる。

克則「なにかのウイルスか？」

いやこのコンピューターは仕事以外では、
ネットを使っていない」

思い切ってダブルクリック。

途端に画面は真っ黒に。

そして突然表示が。

DELL「データを入力してください」

入力する欄が出現。

名前、年齢、日時、いなくなった場所。
首を捻る克則。

克則「ままよ」

と、さっきメモした少年の名前を入力。
いなくなったおおよその日時も入力。
どこでと書かれた欄に（東経・北緯）
の入力欄が出現。

克則「おい、待てよ。」

東経・北緯なんてわからないぜ。

あつ、そうだ。

G o o g l e E a r t h なら。

えーっと、画面最小アイコンが無い。

仕方ない。

沙也の使おう」

克則、机を回って、沙也の富士通ノートパソコン（以下富士通と表記）を持つてくる。

続いてG o o g l e e a r t h を
起動。

入力欄に、行方不明になった山のキャンプ場の住所を入力。

すると画面はその山のキャンプ場の俯

瞰画面に。

マウスを動かすと、そのポインターの先端の緯度・経度が表示される。

それをメモして自分のDELLに戻り、そのデータを入力。

すると突然、まるでリアルな動画のよう
に画面が動き出す。

写真の少年が、母親の側を離れて、川
の方へ向かう画像。

克則「あぶない！

川へは行くな！」

少年は構わず川の中へ。

しばらく岸辺で遊んでいたが、魚に
つられて深みに。

そのまま、足を取られて、流れに押し
流されてゆく。

まるでドローン撮影のように少年の姿
を追いつけるカメラ。

克則「なんだ、このカメラは！

写すより助けるよ！」

少年は、浮き沈みを繰り返し、ついには目を閉じて流れのままに。

克則、つい手を出して助けようとするが、もちろんできない。

そんなことを1時間繰り返し、再生停止ボタンを見付けた彼は、それをクリック。

動画はそのまま停止。

克則「疲れた」

克則コーヒーポットの所へ行き、カップにコーヒーを注いで飲み始める。

克則「一体どうなってるんだ、これ」

飲み終えた彼は再びコンピューターの前。

再生ボタンをクリックして動画を再生。

少年の遺体は、浮きつ沈みつしながら流れてゆく。途中橋の根元に引っかかりながら、それでも延々と流れてゆく。

克則、早送りボタンを押す、画面が夜になるとほとんど真っ暗になりなが

らも、夜が明けると、なぜかカメラは少年を追い続けている。

そうして時間が3日経った時、遺体は橋桁に引っかかってそこから動かない。

川の名前を調べると長瀬川とある。

そこが最後の橋で、その先は海。

腕を組んで考え込む克則。

そして固定電話を取り上げ。メモした少年搜索本部をプッシュ。

搜索本部受付嬢（22）「はい、繁君搜索本部です」

克則「あの・・・申し上げにくいんですが、今朝長瀬川河口の道を歩いていたら、橋桁に子供の体が浮かんでいました。

多分、繁君だと思うんですが」

受付嬢「え！ 本当ですか！ 。

ちよっと待ってください」

克則「お知らせしたまです。

電話切らせていただきます」

受付嬢「ほんとにちよっと待ってください。

お名前は？」

克則「いえ」

受付嬢「もし本当なら懸賞金300万円が受け取れますよ」

克則「いや、亡くなったお子さんの懸賞金は受け取るに忍びないので、これで」

と、電話を置く。

克則「後味悪いなあ」

と、そのとき来客のブザーが鳴る。

克則インターホンを押して

克則「はい、どなたでしょうか」

大川「昨日電話した大川禎一（42）というものです」

克則「ああ、はいはい。」

どうぞお入りください」

入室ロックを解除する。

中年の肥満気味の男が入ってくる。

身なりはいいが、頭頂が禿げている。

克則、デスクを回って応接ソファのと

ころへ。

克則「どうぞこちらへお掛けください」

大川「はい」

とソファの前で名刺を取り出す。

大川「改めまして。」

大川と申します」

と、名刺を差し出す。

受け取った克則も、胸のポケットから

名刺を取り出す。

克則「どうぞお掛けください」

二人は対面してソファに。

克則「昨日の話だと、奥さんを捜してほしいとか。

捜してお宅まで送るということですね」

大川「違います。

この書類を家内に渡して、サインをもらってきてほしいのです」

と、その封筒を克則に。

克則「開けてもいいですか」

大川「ええ、どうぞ」

克則、封筒から書類を取り出し、拡げ
てみる。

それは離婚届で、大川禎一の署名入り。

克則「え？

離婚届？」

大川「そうです」

克則「あの、ご自分で渡せばいいじゃないで
すか」

大川「それが出来ないんです。

昨日もお話した通り、家内は家出したき
り、どこにいるかわからないんです」

克則「はあ、そういうこと・・・」

大川「ひと月前に妻から離婚を切り出されま
した。

そんなことおいそれとは返事できず、二人
で喧嘩が続いていました。

妻は証券会社の課長で、その部下の男とね
んごろになったそうです。

仕事柄、夜の接待が多くて、その過程で肉
体関係が出来てしまつて、もう別れられな

いと。

そうしているうちに、私が脳梗塞で倒れて手術。

麻酔から覚めてみると妻はいなくなっていました。

悩んだ末に、そこまで好きならと別れる決心ができました。

だけど妻はどこにいるのか分かりません」

克則「実家の方へは？」

大川「実家にも帰っていません」

克則「会社へは？」

大川「それが、会社に問い合わせると、そんな人はいないと」

克則「それはおかしいでしょう。

奥さんの給与明細を調べればすぐわかりますかね」

大川「妻の給与は銀行振り込みで、その通帳もどこにあるのかわかりません」

克則「ということは、覚悟の上の駆け落ち：」

大川「でも、化粧品も、洋服もそのままで」

克則「それはおかしいなあ。

女というものは、どっかにいくときは必ず化粧品は持っていくものですから。

宜しいでしょう。

お引き受けします。

手付金としてとりあえず30万円いただ

きます」

大川「カード使えますか」

克則「はい」

克則、カードリーダーを持ち出す。

大川、内懐からカードを取り出し、リ

ーダーの上に置く。

克則「暗証番号を」

大川、番号を打ち込む。

克則「次は金額を」

大川、30000万と入力。

克則「念のため確認してください」

大川「はい、これで結構です」

克則、領収ボタンを押す。

領収書が出てくる。

克則「有難うございました。

毎日一回は報告します。

あの、車で来られたんですか？」

大川「いいえ、手術後、フラフラしていて運

転はできません。

タクシーで来ました」

克則「あの、名刺にはカフェ・モカとありますが、喫茶店をやっておられるんですか？」

大川「はい」

克則「どうでしょう。

奥さんの持ち物を調べさせてもらえませんか。

どこへ行ったかのヒントがあるかも」

大川「ええ、ぜひ」

克則「じゃあ、早速」

克則、居間への戸を開けて、聡子に

克則「ちょっと出てきます。

誰が来ても出ないで、居留守して下さい」

聡子「はい、わかりました」

○駐車場の克則の車の前

克則、助手席のドアを開けて

克則「どうぞ」

大川「どうもすみません」

○車の中

克則、大川の名刺の住所をカーナビに
入力。

すぐに行く先指示が表示される。

克則「じゃ、行きます」

○カフェ・モカの駐車場

二人は降りてくる。

大川が店の鍵を開く。

大川「どうぞ」

克則「失礼します」

○店内奥の、居住スペースへの扉の前
大川「こちらです」

○同・居間

大川「妻の部屋は隣りです」

と、横の部屋に案内される。

○同・6畳の洋間

さっぱりかたずいた部屋。

衣類箆笥に鏡台にスチールデスク。

克則、デスクの前へ。

克則「今から机の中を調べます。

そばにいて見ていてください」

大川「今から店を開けますので。

どうぞなんでも見てください。

あなたを信用していますから」

克則「それはどうも。

じゃ、早速」

大川、部屋を出てゆく。

克則、デスクの引き出しを開いて、中

をチェック。

めばしいものはない。

椅子に座って本格的に調べる。

一番下の書類ホルダーのファイルも、ざっと調べるが、株式関係のものばかり。

克則には意味不明。

すべて調べ終えて、腕を組む。

克則「ふーん」

ふと、本棚の隅の赤い小さな本が目に残まる。

開いてみると、それは大川の妻の日記。

克則「これはえらいものを見つけたぞ」

ページをめくって読み進み・・・

○喫茶店内部

大川がコーヒー豆を煎っている。

そこへ部屋から出て来た克則。

手には日記帳を持って。

克則「大川さん、大変です！」

大川「ちょっと待ってください。」

今大事なところだから」

克則「でも」

大川「この豆の煎り方が、コーヒーの肝なんです。」

どうぞそこへ座って待っててください」

と客席を指し示す・

ものの5分経った頃、大川がやってきて座る。

大川「なんですか。」

なにか分かりましたか」

克則「奥さんの日記が見つかりました」

大川「えっ？」

克則「奥さんが日記をつけているの御存じなかったですか」

大川「いいや」

克則「いいですか。」

読みますよ。

5月19日、彼との熱海旅行を終えて帰ってきた。

夜十時だというのに、まだ店の灯りが灯っていた。

おかしいと思って入ると、カウンターの側に夫が倒れていた。

ゆすぶっても起きない。

大急ぎで救急車を呼び、一緒に病院へ。

5月25日、葬式も終わった。

店の中はガランとして、いつもは夫がかけるクラシックレコードの音も無い。

夫には悪いことをした。

私が浮気旅行に行かなければ、死なずに済んだものを。

今日会社を辞めて来た。

彼との関係も終わった」

大きな息をつく大川。

克則「変な日記ですよね。

あなたはここに生きているのに」

大川「思い出しました。

私は死んだんです」

克則「何言ってるんですか」

大川「病院で、医師たちが脑梗塞がどうか

言っているのを聞いているうちに意識が無くなりました。

気が付くと、一人でこの店に。

私はたぶん幽霊なんです」

克則「しつかりしてくださいよ。

そんなはずないでしょ。

ほら、私が触っても、あなたの体はここに。

幽霊のはずない」

と、その時、天井が眩しい光に満たされ、大川の体が、その光の海の中へ登ってゆく。

大川の足に掴まり、引き下ろそうとするが、大川の体は、克則の手をすり抜けて、天高く昇ってゆく。

大川「有難う、林さん、さようなら」

それはあつという間の出来事だった。気が付くと、店内は暗く静かになっていた。

克則の体が震え始めた。

○ 克則の車

克則は無が夢中で店を出て、車に乗り込み、発進。

克則「こんなこと人に言っても信じてもらえないよな。

幽霊に会ったなんて」

震えながらも速度を守って運転する
克則。

○ 林探偵事務所の中。

克則、ドアを開けて入ってくる。
自分のデスクの前に座り、大息をつく。

克則「何だったんだろう、あれ」

克則、立ち上がり、居室の方へ。

○ 同・ダイニング・キッチン

克則、缶ビールを開けてコップに注ぐ。
そして一気にあおる。

そこへ菊が買い物バッグを持って入ってくる。

克則「ああ、お義母さん」

菊「どうかしたんですか、昼間からビールを飲んで」

克則「どうかしたんです。

ほんとに驚きました」

菊「何が？」

克則「ええっと・・・。

考えをまとめてから、あとでお話します。

今夜の夕食は何ですか」

菊「高野豆腐とニンジンとインゲンの煮つけ

と、アジの塩焼きとみそ汁です。

どうでしょうか」

克則「ああ、いいですね」

と、その時、聡子が、ベランダから洗濯物を抱えて入ってくる。

聡子「ああ、お帰りなさい」

克則「はい、ただいま」

聡子「沙也の情報は無かったですか」

克則「ええ、あ、警察に寄るのを忘れてた。

でも、行っても駄目でしょう。

仕事柄何回も失踪人捜査の為警察に行きま
したが、よほどのことがない限り警察は動
きません。

警察も忙しいんです」

聡子「でも」

克則「落ち着いて情報を待ちましょう」

残りのビールを呷って出てゆく克則。

○同・ダイニング・キッチン（夜）

4人が食卓を囲んでいる。

克則「このアジおいしいね」

菊「下のスーパー、良心的よ。」

どれも新しい物ばかり」

克則「このマンション建てる時、スーパーか
コンビニかどちらにするか迷ったんです
よ。」

でもコンビニにすると、若いのが夜遅くま
で騒ぐし、車のエンジンは掛けっぱなしで
うるさいし、それでスーパーにしたんです。
おかげで、スーパーの賃料で、例えば仕事

無くても食っていける」

聡子「ここのマンションと駐車場、お金かかったでしょう」

克則「土地は親のもの。

株、株ですよ。

大化けした株があつてね。

それが無ければ、警察官の給料じゃとても」

菊「今でも株買ってるの？」

克則「いや、沙也の小言がきいて、今ではや
つてません」

聡子「そうねえ。

危ない物には手を出さないほうが」

克則「それはそうと、直央ちゃん、学校どう
だった？」

直央「うん、まあまあだったよ」

克則「まあまあって」

直央「クラスに悪いのはいないし、先生も優
しいし」

克則「そうか、それはよかった」

直央「でも、なんかおかしいんだ」

克則「なにが」

直央「なんかこう・・・おとなしすぎるんだ。

質問されても、手を挙げる子もないし」

克則「ふーん。

そんなもんかね、近頃の学校」

直央「ちがうよ。

前の学校は、わからなくても手を挙げる子もいたし。

クラスも騒がしかったし」

克則「そうか。

それは変わってるな。

まあ、いじめっ子いなきやいいよ」

直央「うん」

○同・事務所（夜）

克則、2台のノートパソコンを広げて
電源を入れる。

富士通では、グーグル・アースを立ち
上げ、大川の喫茶店の東経・北緯を調
べる。

それからDELLの「尋ね人」をダブルクリックして起動。

そこに大川の名と死んだ日を入力。

さらに喫茶店の緯度・経度を。

画面は喫茶店の中。

大川の妻、美加（38）がカウンター
の向こうでコーヒーを飲んでいる。

客はただ一人、美加の正面の椅子に。

前田勇（35） 美加の不倫相手「やっぱりだ
めですか」

美加「くどいわよ。」

あの二人の旅行の最中に夫が死んでしまっ
た。

不倫さえしていれば、半身不随でもあの

人は生きていた。

これがどれほどの責め苦かあんにわか
る？

私も会社を辞めてあの人のこの店を引き

継いだ。

せめてもの罪滅ぼしよ」

勇「そうですか。

しかたがないな」

美加「早くいい人見付けて結婚なさい」

勇「うん、じゃあこれで。

ときどきコーヒー飲みに来ますから。

えーつと、お代は・・・」

美加「いいわよ、今日は」

勇「すみません」

勇、そのまま店の外へ。

大きなため息をつく美加。

○探偵事務所（夜）

克則、息を潜めていたのを思い出し、

大きな欠伸を。

克則「せめてもの罪滅ぼしか」

しばらく空中に視線を泳がす。

克則「そうだ、こいつで沙也を捜せばいいんだ」

克則、一旦尋ね人のコンピュータの電源を再起動し「尋ね人」のアイコンを。

黒い画面に、日付と、沙也の名と年齢、性別を入力し、グーグルアースからこの事務所の北緯と東経を入力。するとこの事務所の内部の光景が。いつも沙也の座っている椅子に、なんと沙也本人が座っている。

克則「ギャー！」

驚いた克則、椅子からコケる。

モニターから目を離さず、ゆっくりと起き上がる。

まじまじと沙也の画像を凝視。

克則「動いている。」

写真じゃない」

急いで居間の方へ。

○同・居間（夜）

部屋に入ってくる克則。

一人椅子に座ってニュースを見ている聡子。

克則「お姉さん、ちよつと来て。」

大変なんだ」

聡子「なに？」

克則「来ればわかる」

○同・事務所（夜）

克則は自分の座席に聡子を座らせる。

訳が分からず着席する聡子。

克則「これを見て」

とモニターを指し示す。

聡子「あ、沙也！

動いてる。

これ録画？」

克則「録画なもんか。

ほら、この日めくりを見て」

指の先には日めくりカレンダー。

9月26日とある。

克則「それと、この時計」

壁掛けの丸い時計は8時25分。

聡子、この部屋のカレンダーと時計を見上げる。

聡子「あ、同じ・・・。」

これは・・・」

克則「何故か知らないが、こことそっくりの

部屋に、一人沙也が座っている」

聡子「どうして？」

克則「俺にもわからない」

聡子「あの子、何やってるの？」

克則、マウスを操作して、沙也の肩越しにモニターを見る。

克則「青色申告の帳面をつけてる」

聡子「おい、沙也ちゃん」

克則「聞こえるもんか」

聡子「どうして？」

克則「だって・・・。」

あ、もしかしたら。

ちよつと待っててね」

机の中から、有線のマイクを引っ張り

出す。

それをDELLに差し込み、デス

クトップ右下のマイク音量を上げる。

克則「やってみよう。」

おい、沙也ちゃん。

聞こえるか」

沙也のモニターの帳面が消え、画面は

真っ暗に。

そして、DELLから同期要請がありました。同期しますか」

の文字が。

迷っていた沙也はOKを。

すると沙也のモニターに克則と聡子

の姿が表示される。

沙也「うわあっ、なにこれ！」

その声は克則には届かない。

なにか大きく口を開いて話しているが。

克則「おい、沙也、聞こえるか」

画面の中で彼女は大きく頷き、なにかしゃべっている。

克則「いいか、その机の右の引き出しの一番

上を開けろ」

沙也、引き出しを開ける。

克則「その中に、こんなマイクが入っている。

それを取り出して、ノートの前の方のマイク入
力につなげ」

沙也、その通りにする。そして

沙也「あなた！」

克則「今聞こえた。

これで話ができる。

そこはどこだ」

沙也「何言ってるの。

事務所の中よ」

克則「そんなはずはない。

事務所にいるのは、俺と聡子姉さんだ」

沙也「そのようね。

同じ場所に見える。

それより、あなたも姉さんも死んでるのよ。

生きているはずがない」

克則「俺が死んだって！」

沙也「そうよ、車にはねられて。

きのう葬式を出したのよ。

姉さんたちの葬式と一緒に」

聡子「今、なんて言った？」

私たちの葬式ってなに？」

沙也「健三に殺された、姉さんと、直央と

お義母さんの」

克則「なんだった

健三が！」

沙也「今、全国に指名手配されてる」

克則「じゃ、ここにいる俺たちは・・・」

聡子「幽霊！」

克則「そんなはずない。

ほら、こうして姉さんの肩に触っても実感

がある」

沙也「だって死んだのは本当だもの。

そりゃあ生きてほしいけど」

克則「今日が葬式？」

沙也「ええ、林家と、私の実家の野村家の親

類を呼んでやりました。

三枝家は呼ばなかった。

姉さんたちのお骨を三枝家の墓に入れたく

ないから」

克則「そりゃあそうだ」

聡子「沙也ちゃん、ありがとう。」

ほんとにありがとう。

いつか健三が死んで、殺した私たちと同じ墓に入るなんて耐えられないわ」

克則「参ったな、これからどうすりゃいいんだ。」

ああ、もう何が何だか」

聡子「克則さん、落ち着きましょう。」

もつとよく考えなきゃあ」

克則「もう夜も遅いし、一晩寝て考えよう。」

お前も葬式で疲れただろうから」

聡子「そうね。」

そのほうがいい」

沙也「だけどこのコンピューターどうするのよ。」

朝になったら繋がらなくなったりして」

克則「電源をスリープモードにしておこう。」

それならいつでもこの画面に戻ってこられる」

沙也「わかった。

そうする。

じゃ、お休み」

克則「お休み」

克則、パソコンをスリープモードに。

克則「どうでしたか、義姉さん。

ちよっと信じられないでしょう」

聡子「そういえば死んでしまったような・・・」

克則「お母さんと直央は？」

聡子「お風呂に入っていたけど」

克則「あなたも先に風呂に入ってください」

俺は日誌を書いてしまうから」

聡子「あなた先にお入りください」

克則「ちよっと時間がかかるかもしれないか

ら遠慮せずに」

聡子「わかりました。

じゃあ」

と言って部屋を出る。

○同・ダイニング・キッチン（深夜）

今夜も克則がウイスキーを飲んでいる。

そして同じように聡子が入ってくる。

聡子「どうしても寝られません。

いろいろ考えて」

克則「俺もです。

一杯作りましょうか？」

聡子「ええ、お願いします」

克則、オン・ザ・ロックに炭酸水を。

克則「ウイスキー・サワーです。

どうぞ」

聡子「ありがとう。

でも、沙也があんな形で現れるなんて、信

じられません」

克則「それは俺も同じこと。

でも、沙也が生きててよかった。

ほんとにどうしようかと思っただけだから」

聡子「でも肌が触れ合えるような再会じゃな

いから、不安です」

克則「そう、そうですね」

聡子「あの、お義母さんや直央には教える方

が いい の で し ょ う か 」

克 則 「 お 義 母 さ ん に は 話 し て お い た 方 が い い
で し ょ う 。

直 央 ち ゃ ん に は も う 少 し 日 を 置 い て 。

あ の 、 今 の こ の 世 界 が 幽 霊 た ち の 住 む 霊 界
だ と 聞 い て 、 そ う い え ば 思 い 当 た る こ と が
あ り ま す 。

町 を 走 っ て い る 車 が 随 分 少 な い し 、 人 も や
っ ぱ り 少 な い 。

そ れ と 、 依 頼 を 受 け た 探 偵 の 仕 事 の 予 定 が
全 部 消 え て し ま っ て い る 。

バ ソ コ ン に も 何 も な い 。

こ ん な こ と は 今 ま で 無 か っ た 」

聡 子 「 明 日 か ら ど う し ま す ？ 」

克 則 「 さ あ ・ ・ ・ 」

二 人 と も 黙 っ て し ま う 。

克 則 、 新 し い サ ワ ー を 二 人 分 作 る 。

克 則 「 こ れ で お 仕 舞 に し ま し ょ う 」

二 人 は 黙 っ て グ ラ ス を 挙 げ 、 飲 む 。

○同・事務所（朝）

克則がDELLの画面に話しかけている。

克則「俺がいなくて困ったことは無い？」

沙也「そうねえ。」

高いところのものを取ってもらえないとか、
重いものを持ちあげてもらえないとか

克則「ちよつと待ってよ。」

そんなどうでもいい事だけ？」

沙也「パソコンの不具合を直してもらおうとか」

克則「そんなの俺でなくてもできるだろ。」

切実にほんとに困ったことは・・・」

沙也「やっぱり絶対的に寂しいこと。」

これが一番堪こたえます」

克則「そうだろ。」

そうだと思った。

俺も同じだ」

沙也「でも、こうして話せるのは有難い」

克則「そうだ、そうだ」

とその時、聡子が帰ってくる。

聡子「ただいま。」

また話してるの、沙也と」

克則「うん」

聡子「私も」

と言って、パイプ椅子を持ってくる。

聡子「おはよう」

沙也「おはよう、お姉ちゃん。」

どこ行ってたの」

聡子「直央の通学に付き合っ学校まで。」

初めての学校だから、なんか不安そうで」

沙也「そうね。」

しばらく付き添った方がいいわ。

ところで体はどうもない？」

聡子「ええ、元気よ」

沙也「お姉ちゃんたち3人とも何回もナイフで刺されたっていうから、心配で」

聡子「大丈夫よ」

とその時チャイムが鳴る。

克則「（通話ボタンを押しながら）はい、どちら様でしょうか」

田所恭介（68）「民生委員の田所です」

克則「あ、はい。

どうぞ」

とドアロックを解除する。

田所「おはようございます」

事務所の二人も挨拶を返す。

田所「あの、お二人とも、この世界に慣れま
したか」

克則「この世界というと」

田所「死後の世界、いわゆる霊界です。

いろいろ生前の世界とは違っているもんで

戸惑われているのではと思ひまして」

克則「やっぱりそうでしたか。

なんか違うなと思ってましたから」

田所「お時間良かったら、ちよつと説明しま
しょうか」

克則「ああ、それは有難い。

ねえ、義姉さん」

聡子「ええ、ぜひ。

ああ、あのお義母さんにも聞いてもらつた

方が。

ちよつと呼んできます」

と立ち上がり、居間の方へ。

田所「もう一人いらっしゃるのですか」

克則「ええ、子供も含めて4人です」

田所、ポケットからメモ帳を取り出し

ボールペンで書き始める。

田所「仕事柄、どこにどなたが住んでいるの

か知っていないとね」

克則「ああ、なるほど」

そこへ菊が聡子と共に入ってくる。

聡子「お待たせしました。

義理の母の菊です」

菊「お初にお目にかかります。

どうぞよろしく」

田所「こちらこそ。

では早速。

ええー、この霊界にはセックスといものが

ありません。

男性には陰囊が。女性には卵巣がありませ

ん」

克則、自分の股間に触ってみる。

克則「あ、ほんとだ。

今頃気が付いた。

じゃ、どうやって人類が続いていけるんですか」

子供がいなければ、この世は・・・」

田所「人口は、前世の人間の死亡によってのみ増えます」

聡子「ええ？

それじゃ、人口は増える一方では」

田所「そう、なんにもなければ人間は増え続けます。

でも、この霊界にも死があります。

その時は。光の導くままに別の世界へ飛んでゆくのです。

ですからこの人口は、増えもせず減りもせずです」

克則「最近ある人が光の道に登ってゆくのを見ました。

あれがそうなんですネ。

行きつく先は天国ですか」

田所「わかりません。

前世と一緒にで、帰ってきた人がいないから」

克則「さっき言った人は、死んだから登って
行ったのではありませんけど」

田所「そう、前世へのわだかまりや執着が消
えたときにも、光の道に」

克則「じゃ、前世への想いが強ければこのま
まここで暮らすんですね」

田所「そうです。

それから姿かたちですが、それは死んだと
きのまま続きます。

例えば子供だと、成長しないままです」

克則「それも悲しいですね。

親の立場からしたら」

田所「親と一緒に死ぬ確率は低いですから、

悲しむ人はいません」

聡子「良い人も、悪い人も、この霊界で暮ら
すのですか」

田所「例えば殺人犯などは、ここへ転生してきて、しばらくして地獄に落ちてゆきます」

聡子「落ちる落ちないの判断は誰がしているのですか。」

神様とか、仏様とか」

田所「神、仏は人間の作り出したものです。」

この霊界を司つかさどっているものは、それよりもっと大きなものです。

それは人間の想いから遙か離れたものです。

例えば、小学生がいじめで死んだとき、そのいじめた子供は、ここへくるとやはり

地獄へ落ちます」

克則「厳しいなあ」

田所「国別で地獄行きが多いのは、アメリカ、ロシア、イスラエル、ミャンマー、ドイツなどです。」

もちろん日本も」

菊「日本ですか」

田所「太平洋戦争で、自国、他国含めて二千万以上の人を死なせたからです」

克則「ふうーん、そんな先まで崇^{たた}りがあるのですか。

あの、政治、経済、産業は・・・」

田所「ここは前世のシステムがそのままコピーされています。

だから、米も車も作っています。

ただ死んだ技術者が少ないと、生産が滞りがちです」

克則「株は？」

田所「株式はありません。

証券会社も、取引所もありません」

克則「じゃどうやって資金を」

田所「必要な資金は国が貸してくれます」

克則「そんなことで回っていくのですか」

田所「すべてが規模が小さいですから」

克則「まるで共産社会だな」

田所「というか、共生社会です。

悪意をもって仕事をする人はいませんから。

ついでに言うと、警察も犯罪取り締まりの

仕事は無く、行方不明者の搜索とか、事

故対応とか、災害対応とかが中心です。

さらに言うと、刑務所もあります。

悪事を行えば、すぐ地獄の釜が開くからです」

克則「ウヒョー、それはいい」

菊「宗教はどうですか。お寺とか教会とか」

田所「前世のもめごとの多くが宗教に根差したものでしたから、ここでは無くなっています」。

世界は平和になっています。

あ、すみません。

話し込んでしまつて。

ほからも回る家庭がありますので、今日はこれで」

克則「ああ、はい、ありがとうございました」

田所「分からないことがあれば、ここへ」

と名刺を差し出す。

聡子「有難うございました」

田所、事務所を出てゆく。

菊「びつくりしたわねえ」

聡子「ほんと。

ちよつと慣れるまで時間がかかりそう」

克則「うん、そうだな。

沙也ちゃん、見たた？」

ノート・モニターの中の沙也頷く。

沙也「見たた。

驚いたわ。

みんな大丈夫？」

聡子「慣れなきやね」

○同・居間（朝）

真央がランドセルを背負って部屋を出
ようとする。

克則「おや、今日から一人で学校へ？」

真央「うん」

克則「道覚えたか？」

真央「大丈夫だって。

ねえ母さん」

聡子「うん、一人で行けるね。

道の端っこ歩くのよ」

真央「わかってるよ。

じゃあね」

菊「行つてらっしゃい。

さあ、私も出かけようかな」

克則「え、どこへ」

菊「一階のスーパ―に雇つてもらつたの。

奥の調理の手伝い」

克則「大丈夫ですか」

聡子「大丈夫よね、お義母さん。

料理上手だし。

家にいてもすることないし。

私も行こうかな」

克則「そんなに雇つてもらえるの？」

菊「人手不足ですって」

聡子「じゃあ、ほんとに行きます。

家のことは、ちゃんとしめますから」

克則「それはいいけど。

そうだな、生き甲斐が無いとね」

聡子「そうです。

じゃあ履歴書書かなくちゃ。

用紙買ってくるわね」

克則「ネットでダウンロードできるよ。」

事務所に行こう」

○同・事務所

克則、ノートを開く。

スリープモードが解除されて、前世の事務所が映し出される。

克則「沙也ちゃん、居るかい」

問いかけても返事がない。

克則「そりゃそうだな。」

一日中パソコンに張り付いていることもできななし」

そのとき携帯電話が鳴る。

克則「はい、林探偵事務所です」

明智百合（55）「あ、はい。」

こちら鶴見区児童養護施設あさがお荘の明

智と申します。

今お時間いいですか」

克則「はい、いいです」

明智「今日はちよつと無理なお願いで電話差
し上げております。

そちら三枝真央君のお家うちですね」

克則「はい、そうですけど」

明智「実は、こちらでお預かりしている三村
祥子ちゃんの件なんです」

克則「はい」

明智「実は祥子ちゃんの状態が思わしく
なく、学校にも行かず引きこもっています。

ここが霊界だと説明して、お父さんお母さ
んとは会えないと話しても泣くばかり。

それでも会いたい人はと尋ねると、そちら
八王子に引っ越した直央ちゃんに会いた
いと。

死んでから会える友達に直央ちゃんだけ
だと。

こちらにも困り果てて、それなら、一度直央
ちゃんちに問い合わせてみると返事した
んです。

そこでどうでしょうか。

しばらく様子ちゃんをそちらでお預かり
いただけないでしょうか。

それでもだめなら、やはりこちらで。

どうでしょうか」

克則「それはかわいそうに。

判りました。

直央の母親と相談して返事します」

明智「そうですか。

それは有難い。

では、お電話お待ちしております。

電話は、この番号まで。

有難うございました」

克則「こちらこそ」

電話は切れる。

克則、電話番号を登録する。

そのときノートに沙也が現れる

沙也「ちよっと買い物に行ってたの。

ごめんね。

待った？」

克則「いや」

沙也「なにか？」

克則「いや、特別な用事じゃなく、どうして
るかなと思って」

沙也「連絡くれてから元気よ。」

そちらは？

克則「うん。」

だけど、モニター越しじゃ、かえって淋し
さが募るんじゃないかと思ってる」

沙也「そんなことないわ」

克則「でも、やっぱり生身の人間の方がいい
じゃないか。」

だから、人恋しくなったら、いい人見付け
て再婚してもいいんだぜ。

俺はあんたが幸せなら、かまわないから」

沙也「なんてこと言うの。」

そんなこと考えたこともないわ。

夫婦の生活って、百点満点っていうのは無
いから、ときには喧嘩もする。

あなたとも何回か喧嘩した。

でも知らない内に仲良くなってた。

こういうことを全くの知らない男と最初からやり直すって、疲れるわ。

だから他の男なんて興味ない。

あんたはどう？」

克則「それはそうだ。

新しく付き合い始めた女が、わがままで、
癪に障るようなことをやり続けるって
うのは、おおいに可能性がある。

その気苦労を想えば、あんた以外とは付き
合いたくない」

沙也「そうなの。

それはうれしいわ」

克則「今晚のおかずはなに？」

沙也「もう、私一人だから、何を作るって
う気も起らないから、下のスーパーでお惣
菜を買って来て、それが夕食。

あなたは？」

克則「お義母さんがおいしいご飯を作ってく
れてる」

沙也「聡子は作らないの？」

克則「分担が決まってるんだ。

お姉さんは掃除と洗濯」

沙也「そう、それは良かったわね」

克則「うん、助かってる」

沙也「仕事の方は？」

克則「この間一件あったきりで、さっぱりだ。

市の困りごと相談室に渡りをつけて、そこから仕事をもらえないか考えてる」

沙也「たいへんね」

と、そのとき居間から菊、聡子、直央が出てくる。

真央「あっ、おばさんだ。

おばさん、こんにちは」

沙也「こんにちは。

学校は楽しい？」

真央「まあまあだな。

ずっと知ってる友達はいないから、結構気を遣うんだ」

沙也「真央ちゃん、君はそこが霊界たってこと知ってる？」

聡子「沙也、そのことはまだ言っていないのよ」

真央「知ってるよ」

聡子「なぜ？」

真央「だって、学校の友達が教えてくれた」

克則「そうか。」

さていつ話そうかと思っていたんだけど。

それは良かった。

それじゃ直央ちゃんにお願いがある。

前の学校にいた様子ちゃんという子知ってるね。

その子が霊界に来て、お父さん、お母さんがいなくて、毎日泣いているそうなんだ。それで、良く知っている真央ちゃんに会いたいって言ってきたんだが、何日か家で預かってもいいかな」

真央「いいよ」

克則「お姉さんはどう？」

聡子「そういうことなら、来てもらった方がいいと思う。」

ねえお義母さん」

菊「そりゃあそうよ。

ぜひ来てもらいなさい」

克則「よし、決まりだ。

さっそく電話する」

と、携帯を取り出して、電話を掛ける。

克則「あ、明智さん？

林です」

明智「あっ、はいはい。

何でしょうか」

克則「様子ちゃんを預かります」

明智「えっ？

こんなに早くにご返事いただけるとは思ってもいませんでした。

有難うございます」

克則「じゃあ、来る段取りを」

明智「ええ。

あの、何日間ほどお預かりいただけるのでしょうか」

克則「それは、その子がこの家にどれだけ馴染むかの話です。

取り合えず1週間でどうでしょう」

明智「それは有難い。

あの、そちらの学校の教科書は、こちらと違っているのでしょうか。

1週間ともなれば、学校へは行かないといけないので」

克則「直央ちゃん、前の学校と、今の学校と教科書は同じか？」

直央「道徳以外は全部同じ」

克則「聞こえましたか」

明智「はい。

じゃあランドセルに全教科つめて、身の回りのものと一緒に届けます。

転校手続きは、すべてこちらでやります」

克則「はい、わかりました・

いつ頃お越しになれますか？」

明智「二三日内には伺えます。

そのときは前もって連絡いたします。

ほんとにありがとうございます」

克則「こちらこそ、では」

と言つて電話を切る。

克則「どうだ直央、様子ちゃんが家に来るぞ。

うれしいか？」

直央「うん、うれしい。

だって今の学校、誰も知らないもん」

聡子「よかったわね。

仲よくするのよ」

直央「わかつてるよ」

克則「宿題したり、遊ぶのは居間で。

寝るのは、お義姉さんと一緒にいいかな」

聡子「そうね。女の子だから」

克則「直央、一人で寝られるか？」

直央「あたりまえだよ」

克則「そうか、それで決まりだ。

お義母さん、にぎやかになりますよ」

菊「そうねえ。

楽しみだわ」

○前世のある古いホテル（外観）

○ホテルの受付

受付の老人（72）が客の相手をして
いる。

老人「三枝さん・でしたね」

健三「おお」

老人「3日間で、27000です」

健三、財布を取り出し、支払う。

老人「有難うございました。」

またのお越しを」

健三、ロングコートの裾を翻して出て
ゆく。

○前世の林探偵事務所のマンション（外観）

○探偵事務所の中

沙也と一人の警官が相対している。

警官（25）「そう言う訳で、くれぐれも

お気をつけください」

沙也「はい。」

健三が見かけられたのは、ここの駅ですか」

警官「はい。

発見したものの。見失いました。

指名手配の重要参考人ですので、人海戦術で探しています。

ここに立ち寄るかもしれませんので、表で張り付いて警備します」

沙也「それはありがとうございます。

主人も亡くなり、心細い思いをしておりますから。

どうぞよろしく」

と、そのとき、マンション1階の防犯カメラの映像が、壁のモニターに。

沙也「あっ、健三！」

警官「えっ？」

振り向いてモニターを見る。

モニターの健三は、コートの内側から、刃渡り40cmのナイフを取り出し、階段を上ってくる。

警官「たいへんだ。

私は外に出ますから、あと鍵を掛けてくだ

さい」

○探偵事務所の扉の外

警官、拳銃を抜き、安全装置をはずす。
階段の天辺に立ち呼ばれる。

警官「三枝健三、そこまでだ。

ナイフを捨てろ。

手向かいすると撃つぞ」

健三、破れかぶれで階段を駆け上って
くる。

警官、天井に向かって威嚇射撃。

警官「やめろ、死ぬぞ」

健三ひるむ様子もない。

あと3段で階上というときに、警官が

健三の足元に発砲。

弾は健三の右足に着弾し。

健三「あっ！」

健三、後ろ向きに頭から階段を転げ落
ちる。

踊り場に落ちて動かなくなる。

警官、銃を構えながら駆け下りて、健
三の様子を観察。

落ちたナイフを階下へ蹴落とす。

警官「死んでるか？」

林さん、救急車を呼んでください」

事務所の表に出ていた沙也。

沙也「はい、今すぐ」

と事務所に走り込む。

○ 霊界の林探偵事務所

直央と祥子が事務所のスチールデスク
で宿題をしている。

菊と聡子と克則はソファでコーヒー
を飲んでいる。

直央「銅線を何回も巻いたものを何という。

これわかる？」

祥子「コイルだよ」

直央「そうか、コイルか。

そうだよね。

うっかりしてた。

次、コイルに何かを差し込んで・・・。
何かな？」

祥子「鉄の棒だよ。」

今日学校でやったばかりよ」

直央「そうか。」

忘れてた」

聡子「しっかりしてよ。」

あんた授業中になに考えてるの」

直央「あの4時間目は、すごくいい給食の匂
いがしてくるんだ。」

今日の献立は何かになって考え始めると、授
業はどっかへ行っちゃうんだ」

克則「いいぞ、直央。」

その調子」

聡子「克則さん、やめてよ」

克則「いいじゃないですか、おおらかで」

聡子「頼むから。」

ここ霊界にも大学はあるだろうし」

克則「しかられちゃった」

そのとき、克則の前のパソコン画面に

沙也が現れる。

沙也「あなた、大変よ。

健三が死んじゃった」

聡子「なんですって！」

菊「本当なの？」

沙也「本当です。

ナイフを持ってここへ乗り込んできて、
ちやうど警護中のお巡りさんに助けられ
たの」

克則「なぜ死んだの」

沙也「健三がナイフで襲い掛かろうとしたと
きに、お巡りさんの銃が・・・」

克則「当たったのか？」

沙也「足に当たって階段を転げ落ちて、救急
車を呼んだけど、首の骨が折れて」

克則「そうか。

もしかして健三もここ霊界に来るのか」

沙也「分からない」

聡子「怖い！」

と、その時、事務所の入り口にボーツ

と人影が浮かぶ。

それは次第にはつきりとした形を取り
始め、ついには健三の姿が。

健三「聡子、ここにいたか。」

捜したぞ」

とコートの内側からナイフを取り出す。

健三「いいかげんくたばれ！」

受付を越えてこちらに來ようとする健
三。

聡子、直央、祥子、菊が寄り添って、
事務所の隅へ逃げる。

克則、事務所の刺^{さすまた}又を取り、健三の前
へ。

克則「健三、目を覚ませ。」

お前は死んだんだ。

死んだ後も家族を殺すのか」

健三「しゃらくせえ。」

お前も血祭だ」

とその時、健三の足元に大きな穴が開
き、炎が噴き出す。

炎は健三を飲み込み、彼の体はゆつくりと穴に吸い込まれてゆく。

克則「地獄の門だ！」

ものの十秒程で彼の体は穴に飲み込まれ、そして一瞬の内に穴はふさがれる。

克則、穴の開いた場所に駆け寄って、手を当てる。

克則「熱くない！」

あとの四人が恐々と近づいて来る。

聡子「何が起こったの」

克則「民生委員の田所さんが言ったとおりだ。

悪人は霊界では地獄に落ちると」

聡子「そうなの。

まだ震えが止まらないわ

克則「もう、なにかも終わった」

とその言葉が終わるのを待たず、天井に光の道が遙か天空に向けて。

そして、聡子、真央、菊の体がゆつくりと道に登り始める。

一人残された様子を、克則は抱え上げ

克則「義姉さん、この子も天国へ連れて行って！」

聡子は祥子を抱え上げ、一緒に天に。
聡子「さようなら、克則さん。」

天国で逢いましょう」

そして4人は見る間に空のかなたへ。
気が付くと、光の帯は消え、一人部屋に残される賀彦。

克則、ノートパソコンに近づき

克則「見たか」

沙也「ええ、見ました。」

恐ろしかった。

でもよかった。

姉さんたちが天国へ行けて」

克則「そうだな。」

でも俺は寂しくなる」

沙也「なぜあんたは天国へ行けなかったの」

克則「それはやっぱりお前さんが心配で」

沙也「わたしのことなんか心配せずに。」

今からでも遅くないからあなたも」

克則「電車じゃないんだから。」

行きたいときに行くっていう風には・・・。

それに、これから地球はどうなっていくの

か心配で」

沙也「大きく出たわね。」

地球が心配なの」

克則「そりゃあそうだ。」

いじめられているパレスチナやウクライナ

やアフガンや、ウイグル自治区の行く末が

気にかかって」

沙也「あなた総理大臣なの？」

克則「そうじゃないけど。」

でも、苦しんでいる人たちが助かるのかど

うか、やっぱり知りたい」

沙也「そうね。あなたはいつも新聞は一面か

ら見ていたし。」

その点私はお気楽なものよ。」

まず見るのはテレビの番組表」

克則「そうだった。」

テレビで言うと、あの（大食い選手権）と

いうのは不愉快だったな。

世界には飢えた子供たちが何千万もいるのに、食い散らかす映像を写すというのは、普通の感覚ではできないよな。

日本人はどうなってしまったんだろう」

沙也「あなた、これからどうするつもり？」

克則「前にも言った通り、探偵業はこの霊界では流行らない。

もう一回警察に戻るかな。

ここでは、殺人事件もまったくないし、安全かも」

沙也「それか、あなた言ってた漁業は？」

克則「そうか、お前に言っただけだったか。

ここ霊界では、動物も魚も鳥さえいないってこと」

沙也「そうなの。

じゃあ魚料理も肉料理も・・・」

克則「そうなんだ。

でもカニカマみたいな模造肉はあるから、そう不自由はない、

けっこういうけるんだよ、模造肉」

沙也「へえっ。

でもあなた、食事はどうするの」

克則「朝は今まで通りパンとサラダ。

昼は外食か下のスーパ―で弁当を。

夜だけは自分で作ろうと思ってる」

沙也「へえ。

じゃ、私が夕食のレシピを教えたい。

そうすりゃ、二人で同じものを食べられる」

克則「そうだな。

あ、そうだ。

このDELLを居間の大きなテレビに繋がば、大きいお前の姿が見られる。

早速やろう。

今からMDHIコードを買いに行ってくる。

お前さんもそうすれば、居間で二人でくつろげる。

行ってくるよ」

掛けてあったジャンパーを羽織り、事

務所を出てゆく克則。

○探偵事務所横の居間（夜）

克則、32インチのテレビに繋いだD
ELLのワイヤレスマウスを操作し
て、（尋ね人）のサイトに入る。

画面に沙也の大きな姿。

克則「こりやあいいな。」

なにより安心感がある」

沙也「そうね。」

細かいところまで見られる。

あ、あなた今日、ひげ剃ってないでしょう」

克則「え？」

そうか？

おお、そうだったな。

これはまずい」

と、洗面所からシェーバーを取って来
てゴリゴリと。

沙也「ちよつと、ご飯の時間よ。」

後にしなさいよ」

克則「そうか、じゃ後で。」

しかし、このサラダ、うまいな」

沙也「私の言ったとおりには造れば、私の料理でしょ」

克則「そりゃあそうだけだな」

と、のこりのビールを飲み干す。

沙也「あゝ・心配なことがあるの」

克則「なんだい。金の事か」

沙也「お金は下のスーパーの賃貸料でなんとかやっていける。」

それより、このパソコンのこと。

これって10年も20年もこのまま使えるの？」

克則「ああ、そうか。

それはそうだ。

事務所のWINDOWSの入ったデスクトップパソコンは、買ってから24年たってるけど、ネットには繋げないけどちゃんと動いてる」

沙也「ノートパソコンはどなの」

克則「さあ、WINDOWSが更新されるた

びに買い替えてたから、何年持つのかわからない」

沙也「これが壊れたらどうするの」

克則「そうすると、あんたと話し続けられなくなる。」

考えなかったな」

沙也「困るでしょ」

克則「うん、困る。」

さあ、どうしたものか。

基本的には、ノートパソコンの寿命は、デスクトップより短い。

たぶん薄い本体の中へ、ギュウギュウに装置をおしこめているからだ。

だから、デスクトップのほうが長持ちする」

沙也「じゃあ、今の内に、デスクトップに換えましようよ」

克則「そうだな。」

だけどそうすると、この（尋ね人）のアプリも含めて、引っ越ししないといけない」
沙也「どうするの」

克則「あんたの場合は、メカ音痴だから、パソコンショップへノートを持ち込んで移植してもらうほかない」

沙也「簡単に出来るの？」

克則「この尋ね人のアプリはどこにも売られていない。

霊界特有のアプリだ、

だから、クローンを使って、同じ記憶メディアを作らないといけない。

しかし、クローンを使ってメディアを作ってデスクトップのパソコンに差し込んでも、動くかどうか知らない。

やつぱり専門知識が必要だ」

沙也「お金かかるんでしょね」

克則「そうだな、最低ウン万円、いやそれ以上かかるかもしれない」

沙也「でも使えなくなるよりまし」

克則「そうだね。

おれも早速明日からやってみる。

こうして二人で仲良く暮らして行こう」

沙也「そのとおり。」

私もできるだけ早く死ぬようにする」

克則「やめろよ、そんな言い方。」

自殺なんかするなよ。

自殺すると多分地獄に落ちる」

沙也「おお怖い！」

自殺はやめ」

克則「そうだとも。」

二人でコンピュータを間に仲良く長生きし

ようぜ。

酒だ、酒だ、酒持ってこい」

沙也「何かというと酒。」

その性分は死んでも治らないわね」

こうして二人の時間は流れてゆく。

完